

山に親しみ山に想う (10)

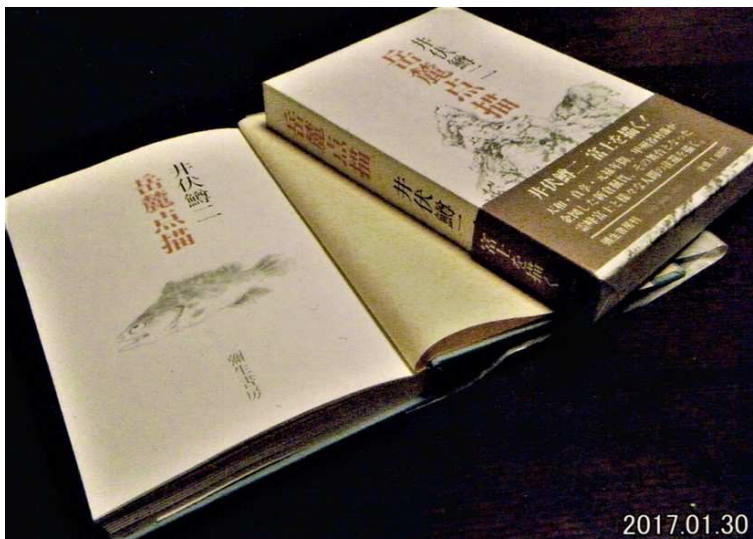
— 郷井伏鱒二の「岳麓点描」 —

<文・写真> =岡本=

先日、ちょっとした幸運に会った。自転車修理店で「岳麓点描」を入手したのである。ほぼ毎日、近くの喫茶店で一杯のコーヒーを楽しんでいる。喫茶店への通り道に先代から長年営業している自転車修理専門店があるが、その主人は本好きなのか、店先の歩道に段ボール箱二つを並べて片方の箱に100円、その一方の箱に200円の古本を詰め込んで置いている。さあ売らんかな！ではなく、気に入れば持って行ってくれという感じである。修理する仕事場と住まいが続いており、主人は居間でお茶でも飲んでいるのが多いのか、仕事場にいる姿を見ることは少ない。

通りすがりに、箱の中を一瞥することはあっても、立ち止まり古本を手にするにはなかった。幸運の日は、通り過ぎる刹那、「岳」の字が目飛び込んだ。立ち止って手に取ると、それが「岳麓点描」であった。山に取り憑かれていると、山関連の諸々の事どもに対して敏感に反応するのであろう。「お金を入れてください」と書かれた小さな箱に200円を入れた。その日も主人の姿はなかった。山行でよく見かける無人の野菜販売と同じである。自転車修理専門店と古本販売の取り合わせも奇妙であるが、無人販売を繁華街で営んでいるのも、代を継いで地元で店を営んできた「本の虫」だからこそできることのように思われた。昨今の世相を見ると、繁華街で古本の無人販売をいつまで続けることができるだろうかと他人事ながら思案してしまう。

「岳麓点描」は、昭和51年頃に月刊文芸誌「海」に連載されたものを弥生書房(1956年創業し、東京アルコウ会の集会場所近くの中町にあったが、2008年に実質廃業した)が1986年に単行本にして出版した。入手したその本(定価1600円)は新品で帯には「井伏鱒二 富士山を描く！……元禄年間、甲州谷村(やむら)藩が企図した新倉掘貫(あらくらほりぬき)、その舞台となった霊峰富士と様々な人間の往還を描く」とある。文化勲章受章者で時代を代表した作家が山を趣味にしていたとは聞かないが、川釣りは大好きだったと聞く(本名の「満寿二」から魚の「鱒二」を付けた由)。井伏鱒二は、昭和初年から山梨県に頻繁に通い地元文化人と交流し川釣りをしていたし、昭和19年頃の疎開先も甲府市であったという。富士山のある山梨県との深い関わりを考えると、本作品を物したのも頷ける。しかし、「岳麓点描」が代表作としてあげられることはない。



「岳麓点描」の主題は、江戸初期の甲州谷村藩（譜代大名秋元家、一万八千石）が河口湖から新倉村に暗渠で用水を通した掘貫工事である。堰き止め湖の河口湖には水の吐け口がなく、大雨が降ると湖畔の田畠が水没し調節が効かない。他方、河口湖の東に位置する新倉村は溶岩流でできた岩石の上であって保水が利かず、井戸を掘っても水が出ない。掘貫工事は水余りの地と水不足の地とを有無相通じさせる一大土木工事であった。長年かけて掘ったものの、工事不備で失敗した。その新倉掘貫が富士山の裾野に現在も残っている。作品は、工事の顛末を城代家老、普請奉行やその手下の働きを通して描いている。その他の点描として、俳句を趣味とする城代家老の邸に寄寓した芭蕉の動静、富士の笠と天気の話、富士噴火にまつわる話、富士信仰と御師の物語、百姓の生活等が抑えた筆運びで描かれている。心に残った件（くだり）は、帯にも書き出されているが、「富士の玲瓏たる姿はいつ見ても悪くないが、お膝元の嶽麓で百姓仕事をしてゐる者から云えば、富士はただ、むっくりでつかく邪魔つけになるだけの存在だ。ことに冬は、天表に聳ゆる大氷柱がそこに立ちはだかつてゐるやうなものである。夏冬とも、年貢稼ぎの阻害外道に外ならぬ。百姓たちは「富士をぶっ倒せえ」と云つてゐる。」と江戸初期に岳麓で生きる百姓の、本音のような対富士山観を述べているところであり、印象的である。



富士吉田市立歴史民俗博物館の説明では、「新倉掘貫工事は三回行われた。谷村藩秋元家による第一回工事（1675年着工）では通水が不十分であった。秋元家の移封後、第二回、第三回の工事が他家により行われて、第三回目の1865年に完成し安定した通水が実現した。大正2年（1913年）に県庁により掘削された新暗渠が開通するまで使用されたが、現在新倉掘貫は使われていない。新倉掘貫は現在の富士河口湖町船津と富士吉田市新倉字出口を結ぶ3.7kmであり、富士河口湖町と富士吉田市の指定史跡になっている。」と言う。

調べたところ、単行本の「岳麓点描」は、新宿区と文京区の区立図書館の場合では区立中央図書館にしか置かれていない程に希少本になっているようだ。ヤマケイ文庫で出版され、多くの山愛好家に読まれることを期待したいものだ。

（おわり）